

今年の企画テーマ「生命—War—」の第1回目、國吉和夫展が終わった。「コザ暴動」から現在の在沖米軍の軍事演習のドキュメント写真が主な展示だった。あまりに刺激的な画面にさまざまな反応。60歳くらいの男性に感想を聞くと、「いつまでたっても変わらない、わじわじーするね」「40年前のコザ暴動の時と状況は似ているはずだが、どうしたのかね」と止まらない。66年も居座る軍事基地の現状に、怒りをあらわにした声が多く聞こえた。



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

同時に、40歳前後を境に若い世代は「今もこんなことが沖繩であるんですか、全然知らなかった」「生まれてた時から基地はあったし、米人には友達もいるし……」と状況認識の浅さと、関心の薄さ。長い時間で刷り込まれた若い世代の無自覚や、生活と基地の癒着が感じられた。

しかし2度も会場を訪れた20代の女性の声には企画者として救われる思いがあった。「いつまでこんなことをしているんだろう……」と彼女は目に涙を浮かべ、言葉をつまらせた。生命の大切さと人間の愚行を感じ取り、琴線に触れたようであった。「訓練に従事する兵士たちの表情は、生々しく、痛々しい。(中略)米兵たちが最初に破壊するの

実像記録する重み

は、訓練のための標的でも敵国の兵士でもなく、きつと自分自身の心なのだろう」(GV紙45号・画廊発行)とフリーライターの高良由加利さんは本質を突いた内容の文を寄せた。

ノンフィクションのフルファインダーの風景は、リアリティーをもって観者の眼前に立ち上がり、写真家のシャッターを押す瞬間と、観者の心がタイムスリップし共振した。美術の枠組みであまり語られない報道カメラマンの写真。ノートリミングの画面から、身体をはった仕事人であり表現者であることを思い知る。「虚像ではなく社会の実像を映す鏡」として記録する重さを痛感した。会場から、公の「写真美術館」

上がった。

美術表現はエンターテインメントのような大衆性に薄く、政治的な市民活動とも異なり地味な存在だ。しかし作家個人の意志と創造性、自由な表現力により覚醒され、その内容が大きな社会的ムーブメントとなる可能性を秘めている。先般の県立博物館・美術館長人事問題、さらに美術館が文化観光スポーツ部として位置付けられた件。県政上部の文化行政への理解の薄さ、専門性を欠いたトップリーダー(館長)の政治的人事は残念でならない。美術表現の多様性は現実社会的役割は極めて重い。懐の深い文化行政を強く望みたい。

(画廊沖繩代表)